

愛 着

鈴木 隆 男

ヒトを含めて、霊長類（ヒト、チンパンジー、ゴリラ、オランウータンなど）の赤ん坊は、ほとんど自分で何もできない状態で誕生し、周囲の大人に養育される間に、様々なことを学習しながら成長するという特徴があります。（これは生理的早産と呼ばれています。ヒトという種に共通の特徴であるゆえに、“生理的”という修飾語を、もう1年ほど余分に母親の胎内で育ってから生まれてくれば、他の高等な哺乳動物と同じように、誕生直後から自分で移動できるのに、早く生まれすぎているという意味で、“早産”ということばを使います。）ヒトという種にとって、最も重要なものが愛着（アタッチメント：attachment）形成です。通常“愛着”は次のように定義されます。

“愛着”とは、乳児と特定の対象との間に形成される強い情動的な絆を意味する。

これはボウルビィによって指摘された概念です。乳児と周囲の特定の大人との間で交わされる応答的な相互作用によって形成されていきます。学習理論の枠組みでは、これはオペラント条件づけと考えることもできます。このような乳幼児期の養育者との間の親密な関係の重要性をボウルビィが指摘したわけです。赤ん坊にとって、身近にいる特定の大人との間に親密な関係を形成し、養育行動を生起させ、それを維持することは、自分の生命の維持のために必要不可欠なものです。おそらく進化の流れの中のどこかで、赤ん坊は大人との関係をつくっていくための行動パターンを獲得し、他方大人になってからは、幼いものをいつくしむような行動傾向を獲得したと思われます。

現行の保育所保育指針（2008）はこのような愛着形成の重要性を、第2章の冒頭で“特に大切なのは、ヒトとの関わりであり、愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して、大人と子どもとの相互の関わりが十分に行われることが重要である”と述べており、この部分以外にもいくつかの個所で“特定の大人との応答的なかかわり”の重要性が指摘されています。

1973年にコンラート・ローレンツが、他の二人の研究者とともに、動物行動学の領域で初めてノーベル賞（医学生理学賞）を受賞しました。業績の中心は“生得的解発機構”に関するものと、“刷り込み”に関するものでした。当時彼らの業績が翻訳・紹介されたため、特に“刷り込み”という概念は一種のブームといえる状態でした。刷り込みというのは、孵化直後から自分で移動可能な、離巢性の鳥の雛が、最初に接触した、声を出しながら動くものを自分の親として認識し、そのあとをついて歩くメカニズムです。この現象は、臨界期と呼ばれる、誕生後のごく短い時間にしか起こらないのですが、当時、ヒトの愛着形成を、このような臨界期と刷り込みという概念で解釈しようという動きがあったほどです。しかし愛着は刷り込みのように誕生後のある短い期間に、瞬時に成立するわけではなく、時間をかけた相互作用によって、徐々に形成される点に注意が必要です。

〈引用・参考文献〉

厚生労働省（編）『保育所保育指針解説書』株式会社フレーベル館，2008.

平山 諭，鈴木隆男（編著）『ライフサイクルからみた発達の基礎』ミネルヴァ書房，2003.